

次世代の 笑顔のために 事業を創出

文・渋澤 健

カメラを向けると、子どもたちがケラケラと笑顔を返してくれました。

コロナ禍前の2019年の秋。日本経済新聞社が主催する東アフリカ・ツアーワーの終盤で印象に残っている一コマです。笑顔は、どの国でも通じる共通言語であると感じました。

身体の邪気を洗い流してくれるウガンダの大自然も体験しました。ただ、都市部に入ると身動きが取れない渋滞にはまり、排ガスで息が詰まります。渋滞から解消されても舗装されていない道路が多く、乗車席から腰が宙に浮くほど揺すられ、身心から気力が振り落とされるほどでした。

アフリカでは、人口が都市部に集中する深刻な社会的問題を抱えています。

ただ、ウガンダの首都カンパラ市内のインキュベーション・センターを観察すると先進国と変わらない空間があります。女性も数多く、若手ウガンダ人がラップトップPCの画面をにらみながらカタカタと手を動かして、それぞれのスタートアップ事業の展開に挑んでいました。

エチオピアとウガンダで参加したスタートアップ起業家のピッチイベントにおいて、医療データのシステム化、簡易な医療機器、ドローンからAIまで、さまざまな事業モデルの発表を聞きましたが共通点がありました。それは、発表する起業家のすべてが社会的課題を解決したいという決意で事業展開に挑んでいることです。もちろん起業家ですから事業の算盤勘定がきちんと合うことを見ていません。しかし、マイク・マネーだけではなく、マイク・ソサエティも同時に進める彼らの姿に感銘を受けました。

「企業は慈善活動じゃないんだ」——このような声は、いろいろなところからいまだに聞こえています。「慈善活動」の定義とは「社会的連帯感や倫理的義務感に基づいて、罹災者・病人・貧民の救済などのために行われる社会事業」(『大辞泉』)です。



イラスト・中村知史

渋澤 健(しぶさわ・けん)
シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役、コモンズ投信株式会社取締役会長。複数の外資系金融機関およびヘッジファンドでマーケット業務に携わり、2001年にシブサワ・アンド・カンパニーを創業。07年にコモンズ株式会社(現コモンズ投信)を創業。経済同友会幹事およびアフリカ開発支援開発PT副委員長、UNDP(国連開発計画)SDG Impact Steering Group委員、東京大学基金アドバイザー、等。著書に『渋澤栄一100の訓言』、『SDGs投資』ほか。

済」にとどまらない「自立」を促すことだと思います。企業の存在意義とは「利益の最大化」と、ノーベル賞を受賞した経済学者であるミルトン・フリードマンが主張しました。しかし、それは20世紀の思想です。これから21世紀に必要な思想は、「価値の最大化」。そう思います。そして、企業が社会に提供する「価値」とは株主の価値だけではなく、経営者、従業員、顧客、取引先、そして社会などさまざまのステークホルダーへ豊かさを還元すること。21世紀の文脈で企業の存在意義とはステークホルダーにとっての価値の最大化です。さて、金融(資金の融通)リファイナンスとは何か。それは、ファイナンスする側が融資先・出資先・投資先のあり方を判断すること。つまりVOICE、声を上げることです。「ステークホルダー価値の最大化」を掲げている存在へのファイナンスは、「それは大事だ」というVOICEを返しています。

かつて日本が途上国から近代社会へと発展した時代に、渋澤栄一という人物がいました。私の高祖父であり、今年の大河ドラマで彼の生き方が描かれています。100年以上前になりますが、榮一は唱えました。

「その人、その国の生存上最も必要なるは実業である。この実業の力を強くるのが、すなわち国の富を強くる所以である」と。アフリカに渋澤栄一の足跡はありません。ただ、今の時代に渋澤栄一がいたら、数々のアフリカ事業の創始にVOICEを上げていたに違いないでしょう。

なぜなら、国の富を強くするのは実業であるから。国と国との友好関係は地理的な、文化的な、意識的な障壁を超え、次世代への遺産になるから。そして、笑顔は大事であるから。



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust



お金はモノやサービスの売り買いにて
も便利なもの。しかし、途上国では人々
にお金が届きにくく状況も多い。JICA
は社会の隅々にまでお金が回るよう
金融の仕組み作りを進めている。
Catchlight Lens/Shutterstock.com